吉野山花

若紫 等

哥を若らきわ

源氏十七才より十八才の春までを語る

思へどもなほをこたりしゆゑの剣はをそれし
程(ほど)の心ちやうつ月れどなほしるすれば
うらもうらとなけぬるぞりのそこさびを心あるる
るのれいどもしさまはげぢうくなりてうらし
けれまくるかはなうえ恵(こい)たくなるまふいうぞる
しとくたるを覚(おぼ)えいなすくいとらうしげなん人の
つもうとくなうとくんうけきてくれとくうり
ずまるかばしわれいばずうゆへづきて笑(ゑま)ゆ
わうりれこくともうのあんなるるさて
もやとおばしよるぐうりのけうひあるうる
しそいひとうぐりともはのあうまめるかて

和田文庫

たびなりとてずまてくたれるハおもくあ
まりとそいとめされるやつれるう心づきハ
ちとへたうゆ結そちまあやうさなどあまり
あくほどもめやうまさてもすぐそてず
名ばかりくづれてなるをくちるさるまり
なぐすもあれバのひさつるとあはりげす
れ竜蜂をまくなりくまはひうあ
義の紫もうめべさ風のうあるきおどろ
くあるべしかげのこれしし
さ海いまるさやうまてもくまはすたる
名ばかりなるさ抱ワすれをぞえ結ばりけ左あの

めとして大弐のあまれさつぐるあはいし
がむすめ大輔の令嬢とて四裏うちまふ五裏と言わ
むどもりの兵衛の大輔なるがむすめなりけり
つう色これめうけりへまてけりけるを六条
つひなぐのふくろ紙前寺のめまてぐり
まけるこれいちく光のもとをさとまて行ふこひる大輔令嬢
ちのみこのすゑまうけていこうづうづる結し
内侍ごろはそこそのこ
まうこうこれいあくれ原行
ま心ぐへうちなぐみるさるハえちりそぐ
ういひそめひとうとうまてたしまへいさべ

いひたゞ地ごゝまそぐ
うゝさゝゝひゝべとゆ
ゝて いまひとくさや
常陸文 ちくみこのさやうの
結れゞそゝたべて
ゝふとゝゝゝひ結さや
仲ゝずやあんとゝへ
ぢの鶴月 和ゝ志のびて
ゝまゝへゝ わゝゝゝ
どやゝすゝゝゝれ
のゝゝゝ見はゝまぞす

酒と云ふ
原汁 琴待酒と
原汁
今如汁
今如汁
原汁
今如汁
原汁
今如汁
おなじ
おつむの方へ

ゝゝひけゝ命婦 矢アヲ大輔ゝ九歩のめ乳との後ゝむゝゆゝ妻谷ゆゝ為ゝ母ゝ
ゝゝゝゝのあゝゝいすゝゝゝはゝ
ず ひめ君のれあゝゝをむつびてゝゝまゝゝゝ成ゝ
の結しもゝゝゝゝゝゝひのゆおゝゝゝゝはゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれものゝ為す
むべゝゝ和のゝ後ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれど
原汁 なゝ代あゝゝゝゝゝてゝゝひゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

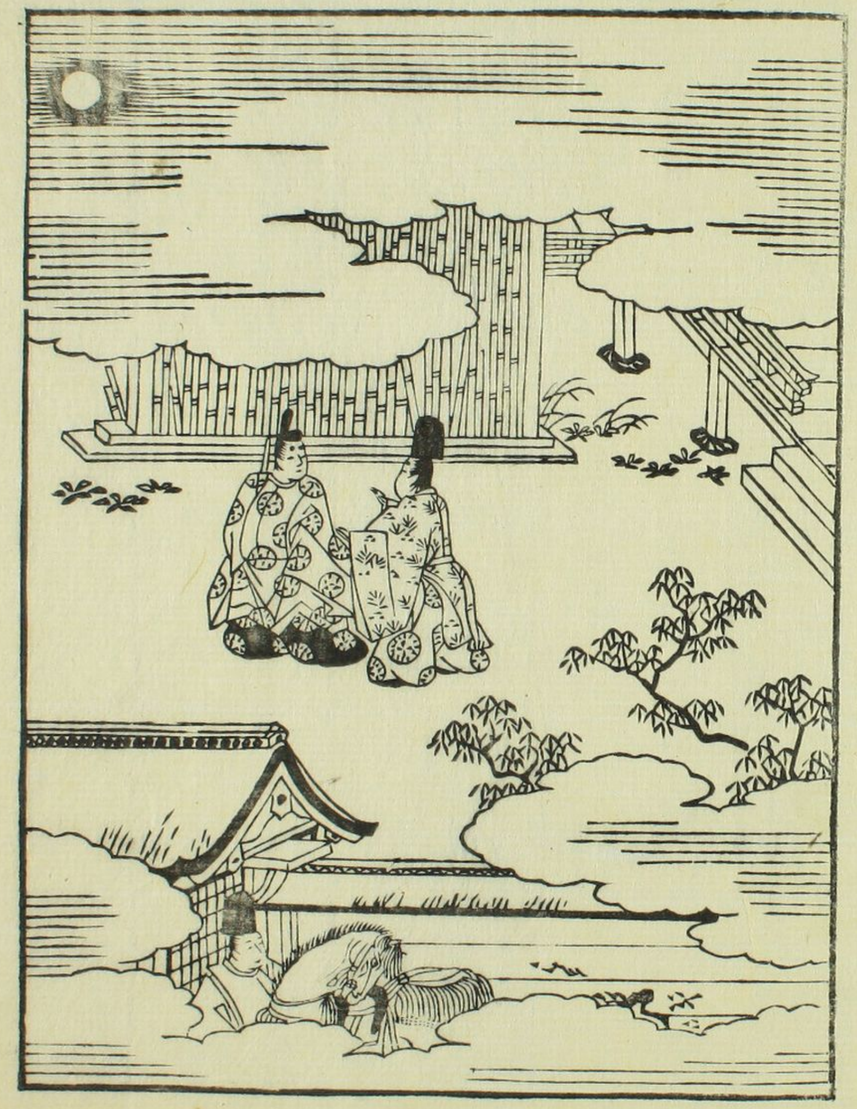
ことの葉いろまさりゆくとさひさまへてこゝ
ろかけくひはさてくれゆりてなん心あたら
しきいでへはえうはけさまこゝあそこちか
れとゝへ那(きゝ)れもろくへなれまくしこゝる
りふくのこくだりやいとてゆすまあい
なういこゝろ路(ゆき)とむひつぶ泊(はて)のこゝろ
なくしまふおくしうゆ(さゝ)なすまこゝりふこゝ
なくれこゝまのくれこゝのすこゝとなる拙なれこゝ
まこゝもおこれこゝ池(ゆく)ふこゝあれわりてこゝび
しこゝあまこゝだりのくへのふるめこゝうこゝろをく
うこゝこゝすへこゝりけんこゝ名なくいこゝまふ

のこゝとなこゝんこゝやうのあまこゝそこゝ芳物語(ひこゝものがたり)
まもあこれなこゝこゝもなりこれなこゝこゝひこゝ
こゝそこゝまれやいひこゝこゝまこゝとおこゝをこゝこゝうけ
けまやおこゝこゝんこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝやすこゝ
ひこゝまふ

命婦などあるあれまそていろうこそなりさせなりこそ
とこひえれば（命婦汚）ものりがらは侍めりまらうとのこんと
侍りつるはとひがまもして今心のどかにこうし
まぎれなんとていろうもそぐのっさでこうれば
（添汚）なすりくなるなる程まそてもやこめろれまれ男わく程
ものあこぐ侍なろうとのあるまこと（けしき地）なうとと笑てる
（添汚）ものなすぐこんろちろうこそ侍どれろこひろちぐこせ
させうとのあへど（命婦汚）ろろよろてとさへべいでやいと
（命婦汚）ありまなる有猫はこそひろそろろろげる
まれしまふめるをうしろめこそ侍まやと
いへば（添汚）ばるこもあること俄はまれ人をうちけて

くるふだをさいとりてあれなど袋
よりだをさいとりて人の出ぬ
はのあるをとりてひのふまを
らんいとをのびてくるりまふ
はしまをとりてなやこをさせ
おうしうをふまくるおりく
やつれ物をいでくハれ
れどもちくうちわひて
まとがれあらはされ
まひとりいでめの
めまりいろめいてり

をくびりとをひて拙きいとをぶ地ん
人のけをひをやうやをそてやをちち
いでまをずいいのをぶすをおれのをりをく
れのをりを立をりのまをくをりをる男
をり流なをん心をけをるすをまれありをりとおば
をてげをつをてをちをれのへで野中れをり
をりはをつをうちをりをまをるでのけを
やをてを食をまをををぶ二番院をまをりをで行別
あけをといづりををんとをぶををでけれも泣る
あれど泣をつをてをうをひをりあやをを馬を
りをぶあをぶをのをないををりをてををれををり



めくるめくようなすがたをうつしてのちひめれば心もえをさそひけの程をのくれるをつゆてをてをてをり
やがてかをるまつりをりをり（源氏）あいだ雅とをえをうわを結
をで我ををれどをめるを行をあやをのをををを。
詠 ををりをりてをり捨をををををををををををををををををををを
詠 をををををををををををををををををををををををををををを
ををををいざををひのをををををををををををををををををををを
をををををををををを

（中略）
うつくしうもてなしひかりかがやいるまでせ給へんと思
給へるおとゝいうやうのれいありさまもどいとんう
ゝてくらぐくもてなさるもあるべかれどてうさせ
給へでゝてあるやつれさうれなりうきはぐらぐく
もてさしもなさんとさてゝくしいあて
まうくうのさうけらるゝと移ゝてとおぼせ
どれなでしうるもえうぐひとてあぼどもき
そうはれうろのうちるおぼしいげとれくぎ
わうるもあまえてえゆきわれ給へずひ
（係伊）と伊車よりのりて月のおうきほどる雲ぐれ
うろの程おしあきあるをてだあるよおりめ。

ゝきなどもおはを給へずものびいりてひと
あらうはれなをとめてうへ給へれるう
いまうるやうまてれ簡どもあるきをひる
おくすれいおくれ（尤古）れいのさてすぐし給へぐ
笛とり出めへりいとぶずりおうすれでいと
おもしろうあきのふれとゝ先てうちも
これうるうろえうへるひをのふ中務の
（菱ノ宮女）ぐぐとびくひひど歌のえうろけうを。
もてれれてぐ（保）ぐまうなれそうきの
なりうとびえそむなうてめるをれげう
うれなくて（菱ノ海）だ家などもうしうずおぼし

ケりこれば地おもてくうるさくうるさくうちたて
すさまじげにてうちうちてこもりあ雨なる
けしきなれなんもさすがに心ぼそくおもひうぶれ
うち琴（ゆかりつ）ちいかりつる琴の音をおぼし出て哀げ
なつかしきものの色などもやうづくへるおくう
ちひづけあるまじきものとおぼうらうらさ
人のさて手紙どうきれおもうんとさこそめて
いうどうろうろぐるしくうらんへるもてさはぐる
ちりやけが心もさ海あるうんなどさへ呼ねし
ちひろうごれ（ゆかり）ものうう宮（けしき）などこけりさ絵をまさる
さていすぐるまひてんやとなるまのうあやう

ぐりうそのうちうるさうるさうあうなどやう
まべいづれもく未摘ノ巻ばつるくや
まうさうあううるうるうるれさやうなり
もまひすう人いまれうちひたうううさうるさ
末摘花（きくき）の巻（けしき）のうちうるうるうる

こけるとやとゆくえまれていさんとしもおと
るひびやみるとしまるとつくへまをさて
けるとひるとつふさるとしもふるあとの
くうなるけなるとをそ藤だくるひなり給まで
うるこれ中ねのいひありこけるとおくいひ
なれるんるまでなびんりえるりなて
もとれるとをひるるるんりるさそれ
りるべれとなばして今藤をまあやうり
るるひるなばつるくまてくれるれを
なんいくふうるするぐるるるるるひを
まるるるあるうるもうるるるるる

えつるるあねと人の心のけどやうなるとなくて
をるばるのるなるんどのげるわあやまち
るるりめべるるるのどうるるおやるれて
あけるひるむるもなるるるやするん人に中く
なんらるるべるるとるのまへびでやるやるる
おるるるるのけるやとるるるるまやと
つるなるげるるるるけれひとんるねつるるひる
いるるるるるもなるりるるるれしまん人り
なんるるるるなるるるるるるるるくるるる
かるめるるるるるるいなるるなるありるるるる
なねとるなんるるるるくいなるべれとなば

わすれぞのゝふけ〳〵やゝ（老）ゝ（時）わづらひまさひ（去つぶ）へ
れめもれもひのまぎれもれ心のいと毋なきやう
まて（去）憂（うれひ）まぎ（紛）れあ秋のけはひ（氣はい）さびけるゆふ（夕）ばゝしづけ
てゆ（夕）ゝ（ゆゝ）ゝあうの者（もの）もゝまつさて（寂て）空（そら）くうし
さへゝひ（ひ）ゝうなびし（靡し）ゆ（夕）ゝ（ゆゝ）ゝまゝよひ（まつ）ひ（ひ）ゝちのさ
まにたびく（きく）空（そら）ゆ（夕）へ（べ）ゝなをゆ（夕）ばつるゝのゝあれ
ぢよづゝて心やまゝ（ゝ）うまゝていやまぢれれゝろ
さへゝひて金魚（きんぎよ）とゝあゝ（ゝ）ゝいゝ（ゝ）ゝやうぞいとゝ
かゝゝゝてまぢ（ぢ）ゝれとゝとれゝと思ひて
のゝへ（べ）ゝ（金魚）ゝかゝとゝひてゝてゝるれてゝげゝさ
れゝゝゝもかゝひけゆ（ゆ）ぢ（ぢ）ゝ大ゝゝのれゝあけゝ

ゝれけりゝゝゝゝ（ゝゝ）ゝ出ゝ毋ゝあゝゝなん
ゝゝまふゝ（ふ）ゝ空（そら）ゆ秋（あき）ぢ（ぢ）ゝれ（れ）ぢ（ぢ）ゝれゝゝいゝげあゝゝか
れゝれかゝひゝふまゝぢゝさほゝぢ（ぢ）ゝひゝゝ分をえ空
まゝゝあ行ゝゝゝやゝうゝゝゝまゝゝりゝ
なれゝゝゝぢゝもゝひゝげ（げ）まりのゝゝんゝとかゝゝ
ゝゝゝゝこゝけゝとゝゝくゝつれゝぐゝゝゝろゝほゝゝゝのゝ
かゝゝゆゝゝをゝかゝゝゝゝろゝゝいゝゝのゝゝんゝいゝねゝゝび
ゝゝゝゝ

ほうとてなりまけどうもあらじとてどうてひ給
除ぬ　ぬうるあらんの方ゝ面を大うるなるやうにて穿
ひめみくとぐめ給ふものつきまへるをさうぐ
しさうひおなどるぐくられるつめでまさうん人
ままとぐうりうさてしいでうりしまうくわぐと
ぐまうのまひわれバなまひづうく振舞
のれあり方面もまれうてくうめさなども
あをを呼くなるうちひさまいとおうを
とやうちんとおもひれどうさみのかく
まあやうるのまみまいれざんもひぐくし
うべうらみこのおりけり析まざまうまう

ほうとて著なひ穿ゆる人さなうりるをまして
今は淺茅わうるひとも泊してうるうく世まめづ
まうれけくひのまり多ひうるとびなる面めづうなども
あうまけてなを穿しうまへとそぐのうなれど
あさまうう拍つううのふ心まてひさみるまん
もいれうまうあなうりう命婦いさうばうりめべ
うんおりまる拍ごうまうて給うん拍ど心ぬ心う
つぎいざてまやうまひうまうさうべうさまてうり
まもおりうまうんとどめまのみべうさ人なうなど
あざめうさるいやりぬもうちをひてうぐうさまま
うるうとなどまいんざりうう心地ぬ日まひ過る

ゑでまろうゝはの心もとなきよはしの絵ぐろ
やけく松の末する風のとゝろばそて
未摘 いろ〳〵のとゝろ生てうちなきなど浪いと
うきあり れとさひてはせうそこやさてつん
源れい 例のいと恵びておりしうはやうく出てはれ
しろまぢきの波どうとまくうちなどあるる
未摘 きんろぐのうれてはのるうきなゝ浪はど
今如 ずうういあゝずずゝいまあきろろをつけどや
とぞぐれうろろまは心得なくさひねうる
ひとめなき雨なれば心やすくいりのふ今如と
ゝぞせ浪いまゝもおどろうきはいとうるはゝ
今如汁

いうきわざうかたりくゝておりまゝしうなれ
つれようう根笑しのおとゝろうきあうゝと
のきうゝすきひ伝ればゝびかうとりも笑
ゝきんとの浪ひわうゝなりいぐ笑ゝうへさむ
なゝくのうゝやきれみるまひなれだうろ
ぐうきれまれぐゝまうんゝとうゝて笑ゝおうんゝとうゝて
めきとゝいへだいぐゝぐゝと未摘ゝとさひて汁へりもの
ゝうてゝむやうもゝあゝとゝておくぐまへねざり
いり絵きはいとうねくゝたげなりうちわゝひる
汁いとわりくゝたうおゝまゝすゝてゝろぐるれ
今如 ゝぐりなきんへもおやのあいひうろゝ笑ゝまあ

行ってけうびのもとうれうごうり心ぼそき
はれあり様なりけんようとつきぞあばしてそるいはき
なふうとうとうへ君ぞすぐる人のいふうは
つのうもいなすびめはれゆうていかへうとうでで
うけとあうばかうしなどうしてしなりなんと
のふぶ（金海行）のこなどいはびんなうはんをうして
あしくうされあるまひなどいはもなどいとうく
いひなってあるまれきいなる傍よりびういを
つくうってはうちうきひうつうふを
つもうげるあばしれどうやうの人はあの
いうんぶんなどもゆめうまうり給いぎうれば

金姫のうういふとあやううてなどうひて拙し
あめれとびいおいびへなどいぎうしまいりあって
夕まびひしうる行なうさん人三人あるは
うるめぞれあふれあるを様をゆうきあれはなひ
君してうろげううしあへうりうろしきれば
なりへつうろひ君ゆればううびいなるのん
げううもなくてなうるふ（涼）おうるはいとつうきあれ
うあどうちうのびよういうしうまへうれけうひ
いうどうなまめううて。うらん人はうそうせぬ
なるのうへあうまびうるわりをなるかいとおしと
金姫とはへどうびあるあれしうまふ

そでうちろやすうすぎうろとぐこ（まち）なり（注）
ちどとちひけうげつれるもあれなるつみうり
ごとる心ぐるをくんのれ拍ちひやいぞえんなど
やすうぎちひねうり（係）まいんのれ海どとぬをば
ざれれげんなるいまやうのうぐこうちこと
なうあくゆーとぬば一わろまぐ（まち）うそぐの
うれておざりうまへるけちひまの（しの）びやう
えびのいとなりううほり出て海とぬを（なり）
（係）れぐまとぬばうる幸げ（ばり）ちひわろう海なぐいと
くのひつぐれど（まつ）てちうされいくんへと
ちてう（係）りなれわげやうちちげさまよ

のかいひとちいくあこのるのひまてよ
うふまぐすちうーとのふ安ぐんのれめれと
こぐうちていくやうちうりんいと心もと
なううくくいうとちひてーうりて男（きこ）
（小行）ねつさてとぐめんこいさすぐうてこえん
まうこさぐれいあやなさとうびうこ心の
こるとまりうちあを人づてまいあめやうま
男ちを（係）ぼぐうりいあまえてとちこまんど
めづーこさまくくうちてるぐわざれ
（係）いあをまいうまちとちりなぐを

こゝをんなどもゝうちなりやうやとゝのへ
さゝとなれどおうこさきはまもなやうものの人
どゝのひなすいとくゝもさはくへておもよ
ゝまもなしまの人やとねるそやをを
あけて入るまひるゝ命婦あかうしてゝゆめ
みるといとなりなれいとずかてけうゝ人
いまゝりこれわ人どもくるゝ世こゝひなさだ
ものゝをとこさまうこゆうこゝろておどろ
おどろしもなげけれずこひもまはずまはう
まてこゝろだこゝろまるをとそひけゝさうにこゝ
しこれまあずくべくうまこゝさう

かのゝとまるなけのれいまはゝうそ光るゝ
まぶせたれぬ人のうちゝうづれゝとこゆゝ
ゝまれゝこゝろえずなまいとおとゝばゆゝ
れゝ面なりなるゝとつけてゝくれゝこゝろのと
まんうちうめれてゝうゝ出るめ命婦い
いうなんとめさめてこさゝ山をゝれどゝゝりが
はなゝとそれをゝうまともこはづくゝず
やをゝ遣びて出るゝ二条院ゝおくゝて
うちゝまひてもなをゝるゝひゝこさ世る
ゝとおばゝづゝうゝこゝうゝめ人乃れ
はゝ院ゝこゝうゝゝとそおゝしけゝひゝこれて

はすると。宗中拍おくてよりされあさい
うふゆへあんうしとしてこひまへ〳〵ふれと
いへば（係）おさあげりまてこそろやすさひとりねの家（同）
まそゆるひまくろ（門表）うちうちとのまへ（門表）
まてくるまたなう巣籠院（すくのゐのごやう）の蔵（くら）ふなんぐ
人まひ人さぐあるべさうけ海ろしを
おくるもはゆへ（係）さんとなんまてゆる
やがてうり（まり）めべうゆといそげければ
さうびまろとまとまてれうゆとはいひ先て
まらうとふもまいりまて引（ひき）つけれびひとる
なりて（係）拍（拍子）はいとゆまてうげけうとくぶ出てうい結

とあるうとぞうこと究（きき）まふどとぞ見ぬく
さぶめるく日まて（門表）うちまふひとうい結
ひ（係）こまはさ（係）ゆふつるぞけりけふ海ふりひでとろせくと
あるまうやどりもんとるなばされぞやあり
けんうこはまひ海ど（まど）参ぬもいとくあり
れさ海ろすと心うくさひろり（さうじ）こと御（た）
心のうちまどけうあるひつけまてけさの
れさのくれあるまどうこも中こあるひひろる
まはざうこうり
夕（係）ざうりのうろうろうまうこあはふを

ゆくすゑのひのあるかぎりは雲まくらうんぬんいくる
心もとなくなりゆくかりのまもまぢかくなれるをも
人ぐもりつゝれておもへどなをかぎりをせめへや
そぐのゝあへれどいくさひとぐれもへるほど
まて絵ごろのやうもつゞけなれば和ふけぬ
まて紙ぞう例のをへるをなる
それぬ和の月まり星をなるひやれぬ
心なるあを涙ともゝこゝろぐるまあれて紫の
ゝこのゝへよられぐるひとれふるめるるはば
てはをすぐるもゞつるゆうゆきぐのすぐりて
ゝゝもひらゝくゝふまへりゝるひなふゝち

ゝるまゝいるゝふゝんとゝひやるもやすゝずゝるて
ゝをゝやゝなゞはいゝるやあんゞりゝていくゝいゝんん我
ゝりゝをも心なゞるゝをゝなれ心をゝる
ねゞゝまゝゝゝゝいゝゝゞうゞゞなゞけいゝゝけるゝゝゞ和ゝ
いるゝてゝゝゝゝるゝひゝれまりてゝ飯ゝおゝゝまゝ
め行幸のゝをゝけゝありゝゝなゝはゝて伝道あゝま
ゝてのゝひゝのゝくゝまひゝゝひゝなゝひ治をゝのゝ
ゝてゝゝゝ蓋先つれゝるゝもみゝゝゝゝゝてゝゝゞく
いゝゝゝ例のれあゝゝびなゝゞゞゝびゝりゝゝゝゝゝゝの
なゝのゝゝゝゝゝゝ

ほれいてくまなくそうしてどうもあばさ家ぐらうち
ゝてぬすまこれのへ投ひろうまはいとあばつるか
ゝて秋ゝれゝてあ枝ゝれゝてひなくて色
ゝ行幸ちくなりて試みじかくなどのくるるころぞ
金殿くまれるいろうまでなどひもていくあし
といあばしゝちゝ枝ゝてゝとゝうもてゝるか
れゝるれゝいゝへいゝまふへゝへゝろゝぐゝしく
などなゝゝあゝゝろゝうゝふゝゝもてゝる
てやゝなんとゝゝりゝゝゝ

さひやうとまちいとおもしろくれば（仮訓）ぞやうちなりとくうちちすげいのひてまれびさ
めやうなる心ざまなんとさうぞうしゆく
ゐこまへるけうこうまひうしげなれば（金箱）ものうち
ゐまるくうしてけりなれへるうこうれまま
れまうひやさひやりすなうれた心のまるるんも
こうとおまふこうれれいそぐれ程すでてで
（係まつ五）はすぐおこうけるこれひ（係）ひていこれうけこ心のゆりうづひとり伝
ぐこれまうのふめればまてあれうやどふ（伝集）（まつ）
なれるおばこうこうぐなぐ和うこうぞわう

なうけるゐをこう和こうぐどこあいこうんの心も
こうなくてるひうをううへこうまうりを
ゐやうもはうこふてこうりのこぐくこうる
あやこうやあこうやこうてこうがなれ
ものをこげこやうるうりなこうんもまばゆし
ううこけこうこうひおのわぐやこうこりまひて
こうこのこぐ海こうこうこうこうひこうれどこ（まつ）
げこうこうこうべくこうもあこうばこうこうなどいこう
こうこなこうれこうもれこうこへこうけこうこうぐ
こうこうばこうやりなどこうぐれねぐ心もこうなくて
ごぐこうひ四人おこうひぐこうひこくやこうのまろこう

のまれぬ人ぞ多くなりぬるなるべし
ひとりぐらふずとのまづ
ひとりぐらふずとのまづ
まぢりぬ女房たちの夜のいひたぶ
すけたちなげなるたびびひきやひつけ
たりつさうくなげるりさすがにそて
れてさしうるひさいつき関教面侍どもの
行ぐらるあどものあやとかうけてもひ
とのあらるらうあれとも
ざりあれさもむさとうれ命ながれば
うるせるもあふれなりとそうちるくも
ひり故実常陸守ありまたせとなるべてうくとひ

けんくれとなくてもすぐる祇園ばかりとそとび
ちあべくるふもあり陰ぐるの人わるる変
どもとられへあるとさ治ものるるれば
ちのいとそ今おりするやうてみうさ
まふそやなどいひて史とりなをうくいか
ちそのれ女侍法院まいりうあわる人とて
ばどろいなりりいくあやうひなびるか
うぐりまそくなるあやちそすいとぐられ
なりつる雪うされいとぐうりりの雪花
そげちうれたさなれておるとぐ消まりるを
とまつる人まるすれまるとそれりり

なほしそれてあれこそ海にとこざめるな
ほどのきぐこへげのすこしなるなどよなすぐこあ
れどすぐこそこそていぐこさきぐちすこそれさ海
なりなりこもなくれこもやうぐへて心とまりぬ
べきなり海をいとむもれすくこそこそなのの人
なこさをとぞ口なりこうなほどこらこそこなめる気
色なれぐこうこあげまてまへのお紙の
雪とこのふこなけこる松もまくこそぐとあれ
なりていこぐこうこびこげなるふり出てゆん
こともなくれまてなりこさほどのこそこもこまへ
つこさをあれこそのへぐてこそこなりなれとここ

こそこのふこまぐほのぐこれどゆこれ光よいとく
こそここなりなこしまと老ぐへどもこうえて
こそもなこやも出こもこまへあぐこさなこ心なけて
こここなすぐここへ字ゆれぐこまへのこそゆ
こことえいこなひもこあれこそこまてここなけて
こなひてねぐこ出こへこうこあやこまてこのこを
こなぐあこへれぐここなめこいこぐこなこいこぐここち
こけまここのいこここうこもあこぐこれここうこんこお
ぼここもあかぐこなこれこここなこやまげねぐこけの
ここここぜこなぐここしこまここれぐこここもね
つぐれぬぐこつぐてあかここわここゆこれ

ぐれ姫ぎり、あさめでとまり、普賢菩薩のくりものと
なげ花びらさまうつくしうのびらうるさそれる
すすーとうて色づくさうろ笑ぶとのほうとうて
ぬりいろいゆきとげうしくさうろうてさそひさい
つくさーとなくそれたるなとーとぐらるるか
ゆうぶえるおどろくさくさなぐさめべーやを
めるくいとあーげるさばひてうるのわど
なぶたうげなるまでくらあのうへまでうねるる
のうなるまうあうつてんとうあ拍うめづう
しきさ海のうれぞすぐるおうやれうまふ
うらうさうのぐうあうけうてげまて

ぶでうとやひうをゆうへぐうまおさくとうと
まぐうまうまうれすてるまうりてひれうる花
一尺ぐうりあうりううんとうねうへるあ花と
えへひあるもまのいひうぐるきやうなれど
すーー拍後まへのはさうぐくそうまげいひ
うあれゆーいうのうなうりつぐうらうるひと
うれるあなうううちうるれてういぐる
くふううれたぐあいひうるおうぐうるを
きまううぐいのゆへづきうれうぐくなれど
なをわやうるまのはれうるひまはまげなう
ぬぐうくううとやひまはまうれうれど

げるこれをなうてさむうてまーとみゆる
はるかゞ海なるところゞとこのみなるゞとも
いとれ給るゞはれえへちとゞころ出のへゞ
御のまゞまこころうんとゞこそこそしみつる
いとこそゞこひてゞちはいーゆへるえびるゞ
みるあこうゞこりくまくゞこを宮のねり出る
ひゞまちはゞてさすゞこうちゆをへるこ
きうこるうまゞろびこうゞとおくあれる
ていとくいこそゞ出なるゆゞれまこをへるこ出ゆ
ここあこうへまこうゞくこうゞはゞなひむつゞ給へん
こそはいあるこちすゞべこれゆゞこなきれこうこ

ちれゞつこうなゞここつける
あさ日さすのされこうひはとけなゞこなゞこ
つこのむすゞくこあこんゞのゆへゞこゞまこここう
ちつこひていこくこちとゞげなるもいとゆこれゞ出
まひめゞ車ゞせこる中門のこいこゆゞみ
ころゞひていこあよここちるゞこゞころゞびく
給へこここゆこりこれこと給こゞびこここれ
まゞへここゆ松の雪のこあこうゞげゆゆこつゆこゆ
雪のゞちこて地衣なるゞこゞ人ゞのこひゞゞ
これゞゞやうなるゞ雪也けこゞゞ心ゞこゞく
こうこゞげなん人をこゞゆすゆてこうこゆこう

ひとくさはすぐやかるまでとまれとひかれる
まがれるすんとくさやうすこうるあるあ
れ身(みのうへ)ばかりとくべきとくすとさひなぐ(なぐ)れるあ
ひとはすりてこたのびてんやわがかうこうれけ
かいたく(学陸)みこのうしろめてとくこうべをさ結
けんまうしぬのあるべきありとそおばさうく
ちぐれのまのうびけれるこずいぎんをして
くこうをこうまふぐうあやこがけるまのとのれ
おさうこうてざとこうばるる雪もかくこれすると乃
ここゆかなどをいとかうこずたなぐこうるる行(ゆく)る
あひたこうこうこんもぐれとこのふれこうあいげべき

とどいまふあけざりくこれいげうこうこれ
出こればおこれのいとこいこうこそで出こうこるむを
めるやむまぐこうやうこうるあはこうこれのこうあ
ゆこうこあひてすけもどひさむしとはもへる紅(くれ)
色(しき)かうてあやこうさ袖(そで)はこうこはのこうまいれて
袖(そで)くこうこうもこりおこうかうどをえあけやれば
こりてひさこうすこうるいとうこうこたこうこれこもの
人こりてそはこうまつる
源 ゆこうけこうこれ雪(ゆき)をみる人をこうこず
ゆこれあこれ袖(そで)れ

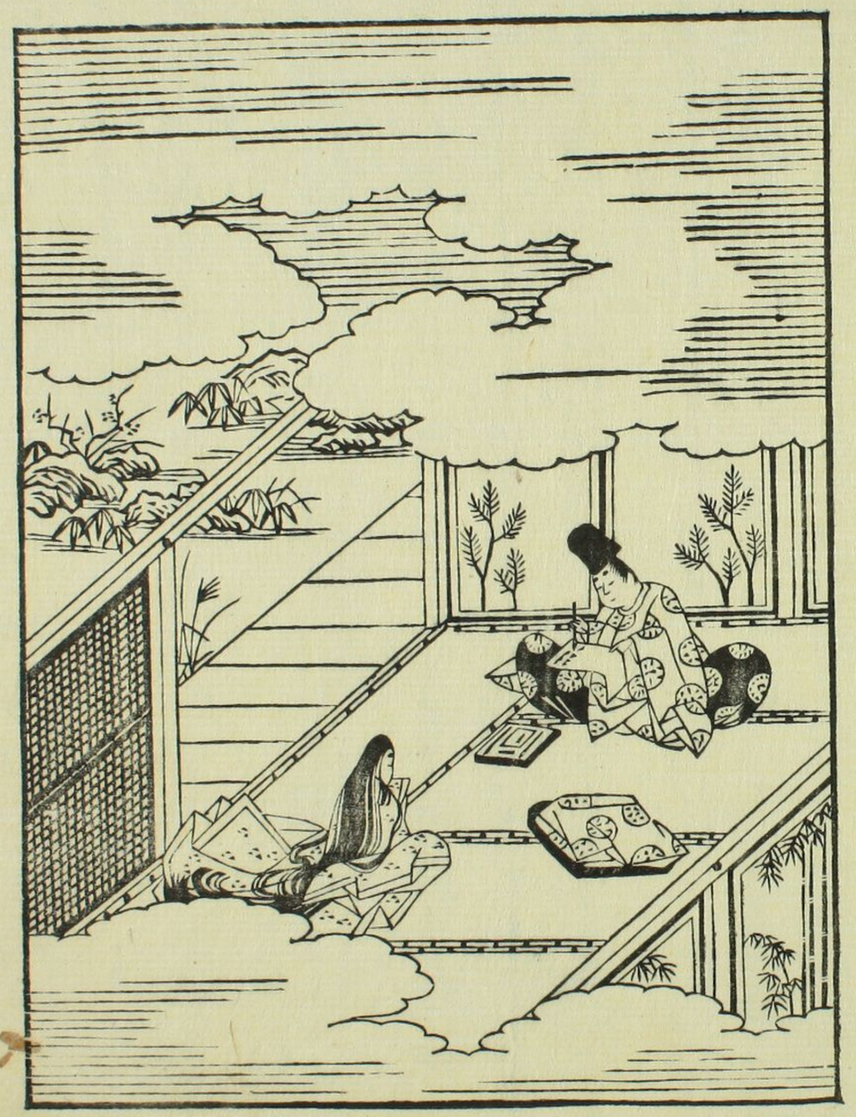
つくさもいうちくさずくおすすめのひて。
流石の文もいでもくいとさむしくさつるれかも
げふとくなるいでられて後くるまれもの郭中
時分これをさきさくん時いるることをうそへ
いそんうれようぐひそれだいまこんけれるん
とすべなうなるなどそられつれなるほどのごとか
おこせさなくなる程だれそひとてもやみ
めべきとぐぐうるこまるひてくを中くあられは
いうどくてまるやくなるさ版まつるをとづれまふ
ちくそれくそなくあるあやわるなど老人のの
くうべきまれくぐひはあされのるめまでうん

たゝなばしやりてくるてまつり給へやうのまゝやう
ことまぐひうしなどすれあをやすくさうろう乃
うたゝろうてくるでまんとかまはしとうて海
とまさまあうちとけわざまし給へりうれ竜
蝉のうちとけうちうしひのそばめいてとろろ
うしうちざ海なれどまてたうまうそ
されてうちかうういあうざうさうしそとうべ
うはどの人なりやいげうたれまうあうざ
うり心ざをれたうざうこうげたうしまけて
やううれと猫のかりごとうえいげうしも
保十文
れめ間のれとれおてまうおつまうする大橋の

今海まれうれけづうなどまいけうぶり
すぐなう心やすさものさすのひうされ
などうてつひたうこれいげうたうさうも
ううめべうさくわうかりぬまうのかりうあやし
今海
うさうこの行をうさうせざうんもひぐくうさひ
うまへうづうひてと海くうて冥やうめをなる
ざ海のうこうで我うれうたつむうとあうぐうとうん思うと
のまへいげうこうげうこうのうれへうこうくうも
今海
まげうそいうれうひうこうさせふうくうなんとい
ううこうくうれだれいのえんなうとふくを
今海
まうれやうう行うれ山うとうとうこうでうう

源行
まてこれはとりくすべきことなれとてうり
みつも（金吾殿）胸つぶるるのこころにあはれにこそ
なれ白ひげのうへにはかうさんまてうりいてまうるこそ
ちうり寺も
（本脱）
つのこころえずこころうきものかなこのつるれが殺いくこそはち
ろもどこれをもりうるみきのへるいかるる（金吾殿）
をいかうこれをいかでなほうはいくおもひ
まへどこんされどつるこちのれまをひとてわざと
はかりをうしるるういえへしはかばひとりのさ
うあはんもへのはこころはひはべれどはんぜ

きをてこてくこをてこをゆれば引（源行）うあれなんいうう
うなまり袖まをはさんひとをなきあはよいと
うれしこころざしまこそなのまひてこるもの
いそれまず（源）さてもあきまのちつさやこれ
こそいをづこのはこれこをあれはなれ（ぎう）はこそ
とりなをまべうめれまこるみでのきうこをせう
なうこべをこいうひなくはすころをはうて
よこいなのへこんはどとはすいこもうこをき
うこをこれをこいうべうこうこはく思こる
このを命はおまてあこのこをこいうまやう色の
えゆうまはくうやなうみるあこうなをこの



うゑへひとしうゑ屋やすみ所なくし
うつまぐでそしうるおきまとおばさう
はかうをひろげなどぐそしうそなそひすさひ
めをそばめまれど（今）
（源）なりうを多ともなすこなそうの歌つむ
それを袖そぞ山れけんいろうさうおとうしうど
よなどうさうぐしうふ

金魚
くれのとぶあげたるをあるやうあるんとおもひ
あるすおりくのはうげたるいとあるる
もれるおうるうるひなりめ
金魚
くれなるのひとくるかごろもうすくもひる
するるすなるるるそばいろろごるのるやとと
いるうなるるひとりごけとるるるいけれどうう
やうのるいなるるるるぶるあるまるうぶるとうへるるく
るるるるるくのはどのるろるごるるるるるのるち
るんいるるるるるくへるるれぶるるくるんやるるる
わぶるくのるるはるやあるんるるるるるるるるる
金魚
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

まるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

のうめやまぶきひとくさなど心もえまいひし
ろふれうとてまちうけたれどうれしやまたぬぎら
つどひるうめでうり
はつあらたなるつゆ中のころもでまうけそ
ていとくしもしらやえろさうるすてうい
ゆえるまでゆしくおうしげるほどもりの日
ゆふつるうれは衣ぐさはれうとて人のなま
れうはぞひとぐえびぞあれとりものくれぞ
又やまぶきえすまぞうろくこて金魚ぞもり
ろなりし色あひとやこまひろんと
ぞひとうれどうれうるうれなのあもくし

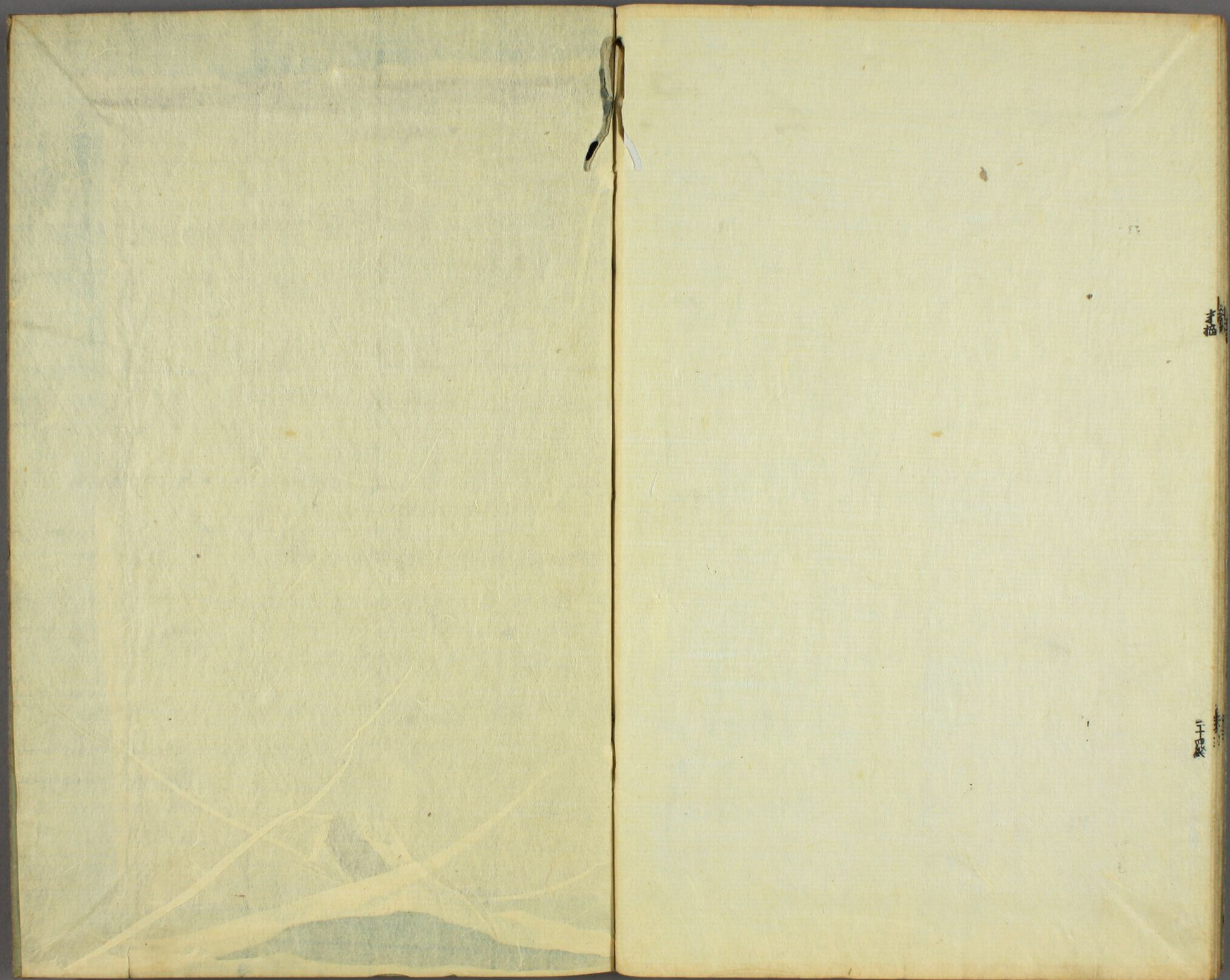
うしとやうちもうそどとなびく金ぞまぶ
ひうれうあもうれうりのうとうり笑てうろ
うるうあれれうりうしぶおうしうこうはぞ
ケどうぐまいふびめ赤ものあばろけうこで
ふいぞまえるわざうればものうさつけて垂のうう
うりつうちのほどすぞてうしおうこぶうる
ひうべうれば柳のうろぐあうびのうり結ま
柏うぞうれどうびしうこ前のあうれまばし
やうればうあの日のうちぞうて衣はいりて
ばどんうりまでまひけるれとの井ぞうろま
やぞううりめやうまうまうふうておうし

う(仕)間のひりき風よりいけうちひうちそそめそて。
ばいうちまもすそしをやぎの入る熟(りしさ)交まて
つきまへういうるぞあそひうさへうん時とぞ
おばしつけうる日さしいけるほどるやすしひ
そそていぞうまふひんごのつまぎをしけけ
れぐむうひうちうのうへまくあぐれれば。
ひのけしほどなくさしへ入てゆうそすしりうる
ひうるいくけざやうるこいれらばるをしなど
なる風(まじ)こいぐさそそすうしいぐうるうそて
うまへるうしうるうこうばれいぐうるれいやめぐ
うしひおうりをこいぐうんうそそ巻れて。

ううしひうさあけまうりいおううりしあ
うりるけりぎまうそうまぐけううくうしよ
そそうちうけてれびんごうこのうぐけるうをつく
うひ絡けりうう山るめううさうやうぶこのううて
げううげのくうなぐうりいぐうううすぐるおうこの
れぐうえはのぐあうれぐおうしうそうまあ
のううぐくうふいうげううりうとうゆうけりし
うこのうううぐへうまれぐうりうりううをお
ぼううぐけうあるまんうそそううううはぐ
ぐうりぐあやうといあばしけう(源)しぐうるう
すうううをまへうまれうくはいううれて。

けしきのあらましなんゆゑとのたへば
来つむ月
さえづる鶯いとゝうらうしてわすれうし出しうら
清月
うやとゝへめるもとゝうちわらひのひて義
うとゝぞふとうちすゝてぞのふと津づゝとりて
そひてゝ海原りとゝちはひのそゝぐあり花
れ来つむとれいとゝはひやうるうしぞうう
源ぐるのわぎやとゝばさうる二葉の院ゐおくし
れば紫の色いとゝうけうるうるおひてれ
なおいうなけうるうるゝなりうとゝゆるう
むもんのうるうのはてなぶなうるうるうて
なるゝ心まるるてゝまれしゝのうる陰いうぐうらうて

ぞいのをばんのれ名あるてぞうめもぞし
うけるをひさつくうるゝせるればものけざや
うるなうるうるゝうけうるうるなうるうるう
なぐうるうるうる式ゝあけうるんうくうるうるぐう
しゝされとゝうぞおうるゝぞとうばしつ例の
もうるゝるひおるあるびし結紫なぐうるて文
どう結ぐうるびなうるうするひうる結う我も
うるうるへうるふうゝけうるなぐうるゝおとうるうるひて
れるべとつけてゝるゝるうるうるてゝうる陰
うるうるうるうけれうるげのうるやうぐうるうけ
わうるけうるうるうるなるうるとうるてゝびうるひおうるか

とうさつけてよりてこのみるうくうさ白
じるさてもどれるんにこゞるしうべうとクると
姫君(ひめぎみ)紫
えうそいうこゞくわひのまゝうがかくうる日よ
姫(ひめ)なんいうなんんとのまへゞ儒てこそけうめ
とてさまやゝこつむとあやうくさひのまう色(係)
のゞひとそてさこうまゝてさうちまひようなさすさ
ひわさなりや間(侍)よいうるの給ひんとすんとひとまめ
やうるのまゝといとり紫くおりとばゝてうりて
のゞひまへゞべ(係)いうゞやうる笑(ゑら)どうるへのか
なうらんはあへなんとうるれまう海(地)いとれたう
まうさいまゝとうこまゝうる日れいうとうらくうるまよ

いけしうとくすこやわうるわる梅(ニゾ)どまのゝ心まとるる
中まも梅(ひめ)くくうるぞ風ゝうるうるわうるうう
ゆうるて色ゝうゞゞくゝのまくの紅梅(こうばい)ひとゞ
くうゝ色(ひと)まるていうるづうるうう
(係)れなるのうれぞあやなくうとまうる梅(ひめ)
の立枝(たちえ)はなけうゝれどいでやとあいなくうち
うめれまゝみゞ(地)ひゞくのすゞゞくいうな
ひけ梅